

二〇三三年二月二十九日

古井戸に注連飾らるる旧家かな
玻璃磨く吾を抱擁す冬日かな
老い母の爪切りやるも年用意
煤逃げで混みし茶房へ我もまた
肝葉念入りにぬりひと日終ふ
黒点のごと鳥渡る高嶺晴

二〇三三年二月二十八日

あるだけの布団を干して子らを待つ
門松の切つ先匂ふ老舗かな

二〇三三年二月二十七日

哀歌めく犬の遠吠月冴ゆる
残照の空に銀嶺浮かびけり
儘ならぬ身重の嫁に鰯汁
風邪に咳く厨の妻を案じけり
夫逝きし年の名残の古暦
うち揃ひ寒柝の音近づきぬ

二〇三三年二月二十六日

牛歩なる師走の街の車列かな
マフラーに顔を埋めて人を待つ
水鳥に揉まれ揉まるる木々の影
辛口の酒に舌焼く牡丹鍋
御手洗の縁に並びて寒雀
家事済ませあとは寝るだけ玉子酒
菰巻かれ身をよじるやに臥龍松

澄子

むべ

あひる

澄子

むべ

なつき

ぽんこ

もとこ

素秀

山椒

もとこ

せいじ

むべ

やよい

かえる

満天

康子

澄子

ぼんこ

あひる

康子

二〇三三年二月二十五日

何もせぬ何もせぬとて年用意
鬼瓦べそかくごとく霜雫
聖夜星揚ぐ丘の上のミニチャペル
枯木立透けて落暉の地平線
また一つ本棚に増ゆ古日記

二〇三三年二月二十四日

立上がるお尻より落つ枯葉かな
遠嶺々のふちほんのりと冬茜
着ぶくれてマトリョーシカのような君
朝日でて綺羅の霜敷くなぞへかな

二〇三三年二月二十三日

悴みてしどろもどろになりし手話
柚子湯して黄色き湯気に浸りけり
彼偲び尽きぬ逸話やおでん酒
吉良墓所の蠟涙凍てし朝かな
偕老の役目分け合ひ年用意

やよい

かかし

せいじ

素秀

康子

かえる

明日香

山椒

もとこ

かえる

うつぎ

むべ

なつき

せいじ

毎日句会みのる選・二〇三三年二月三二日